

南フランス・ロゼール県南部の中世ロマネスク聖堂（1）

中川久嗣

Les Églises Romanes dans la Lozère; Autour de la Gorges du Tarn

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés à l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département de la Lozère, surtout autour des Gorges du Tarn, par exemple, les communes du Rozier, Les Vignes et Ste-Eninie, etc. Ce pays correspond approximativement à l'ancienne baronnie de Canilhac et de Florac au moyen âge. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では、前稿（「南フランス・ロゼール県中部の中世ロマネスク聖堂（4）」東海大学紀要文学部、第108号、2018年3月）に引き続き、ロゼール県の南部に点在する中世ロマネスク聖堂を取り上げる。具体的には、ロゼール県南部の西寄りの地域、すなわちル・ロジエ（Le Rozier）からサン＝テニミー（Sainte-Enimie）にかけての、いわゆるタルン渓谷（Gorges du Tarn）とその周辺にあるロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問調査し考察を加える。

地形的には、ロゼール県南西部の2つの石灰岩台地であるソヴテル台地（Causse de Sauveterre）とメジャン台地（Causse Méjean）という標高1000メートル前後の高原地帯の間を流れるタルン川（Le Tarn）が深い渓谷をうがち、その渓谷に沿っていくつもの集落が点々と連続するまことに風光明媚な地域である。ジェヴォーダンと地中海を結ぶ交通路・巡礼ルートからは外れており、険峻な地形も相まって、いにしえより必ずしも交通の便は良くなかったが、むしろそのゆえに例えばサン＝テニミー（聖女エニミー）をはじめ、多くの隠棲者や修道士たち

の宗教的熱情を誘い込んだのであった。また中世期には堅牢な城塞なども渓谷沿いに点々と建設されたが、実際、タルヌ渓谷の西寄りの地域は中世の間ジェヴォーダンを支配した8つのバロニー（男爵領）のうちの「カニヤック男爵領」（baronnie de Canilhac）にあたり、東寄りの地域は「フロラック男爵領」（baronnie de Florac）に含まれる。ジェヴォーダンに割拠していたこれらバロン一族は、それぞれの支配領域において拠点となる城塞を築いて強力な統治を行い、さらに支配領域内の教会に対しても司教や修道院長などに一族の者を送り込んだり、あるいは土地や財産を寄進するなどしてその影響力を維持していた。

この地方に残るロマネスク聖堂は、建築的にはロゼール県の他の場所と同じく概して小規模～中規模で、多少とも後の時代の改修・改築の手が加えられているものが多い。単身廊形式、南北に付けられた小さめの祭室、複数個の鐘が横に並ぶ鐘楼（鐘楼壁）、多角形の後陣、身廊や後陣の上部に並ぶモディオン、ヴシールを伴って南側に開くポルタイユ（扉口）、などといった特徴が見られる。特に共通するのは、後陣内部および外部に見られるアーケードとそこに施された柱頭彫刻の様式、聖堂内部のとりわけ凱旋アーチやトランセプト交差部周辺に見られるアーチや円柱の仕様、そして身廊の側壁に見られる半円形の壁アーチなどである。

本稿で取り扱う聖堂は、前稿と同じく「ロマネスク期」といっても厳密な時代の限定はせず、11～12世紀のいわゆる盛期「ロマネスク」期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のもので、大なり小なり一部分その時代のものが残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、便宜的に行政地域区分によって整理することとし、ロゼールの県番号（48）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。ここで言う「大まかな地域」は、前々稿まではおおよそ行政区分の小郡《canton》ごとに整理していたが、カントンはしばしば再編されるため（直近では2015年）、前稿からはカントンに沿ったグループ分けはやめ、文字通り地理的な「大まかな地域」ごとにまとめることとした。

なお、本稿で取りあげるル・ルクー、ル・マッスグロ、サン=ジョルジュ=ドゥ=レヴェジャック、レ・ヴィーニュ、サン=ローム=ドゥ=ドランは、2017年に新たにマッスグロ=コース=ゴルジュ（Massegros-Causses-Gorges）という大きなコミューンへ統合された。しかし本稿では旧コミューン区分に従って記述している。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」を用いた。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用のものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。ただし地形的にアクセスが困難であったり、私有地内にあったり、あるいは所在場所が最終的に不明であったりして、直接に訪問・調査できなかつたものもある。それには▲を記した。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（<http://nn-provence.com>）で閲覧可能である。

48.7. ル・ロジエ（Le Rozier）、サン=テニミー（Sainte-Enimie）とその周辺

48.7.1. ル・ロジエ/サン=ソヴール教会（Église Saint-Sauveur, Le Rozier）

ル・ロジエはロゼール県の南西端に位置する人口約 150 のコミューンである。ジョント川とタルヌ川がちょうど合流するところにあたり、夏期にはこの 2 つの川のがつ溪谷やそこにあるシャトーや聖堂などの歴史的文化遺産を訪れる観光客で賑わう観光スポットの 1 つである。ジェヴォーダンとルエルグの境界にあるこの地は、古くはアントレーグ（Entraygues）と呼ばれ、聖三位一体、聖セルナン、そして洗礼者ヨハネに捧げられた聖堂があったが、1060 年にこの地域に領地などの利害を持っていたペルロー、カプリュック、モストウエジョルの領主たちが、それらの聖堂をその土地とともに、今のエロー県にあるベネディクト派のアニアヌ修道院（abbaye d'Aniane）に寄贈した。さらに 1075 年には、カニヤック（特に Déodat de Canilhac。彼はオーブラックにある土地をコンクの修道院に寄贈したことで知られる）、モストウエジョル、ペルローの領主たちがマンド司教アルドゥベール 1 世・ドゥ・ペイルの意向のもと、この地にサン=ソヴール修道院を創建してこれをアニアヌ修道院に寄贈した。言い伝えによると、アニアヌからやって来た修道士たちがここにバラを植えたことから、この地が「バラの野」（campus Rosarium）と呼ばれるようになり、それがのちに今の地名の「ル・ロジエ」（Le Rozier）の名の由来となったと言われる。アニアヌ修道院は、ル・ロジエの周辺地域にも傘下となる小修道院や聖堂の数を増やしていたが（Saint-Pierre-des-Tripiers、La Volpilière、Liaucous、Saint-Jean-de-Balmes 他）、とりわけこのル・ロジエの修道院を大規模なものに拡張した。中世の間、この地はルエルグやオーヴェルニュから南フランスのアニアヌやサン=ギレーム、そしてサン=ジルなどへと向かう巡礼たちの中継地点として栄えた。しかし 16 世紀の宗教戦争の際に、ル・ロジエの修道院自体はプロテスタントによって破壊されてしまい、1633 年からサン=ソヴール附属教会だけが再建された。

このサン=ソヴール教会は、別名サン=ソヴール=エ=サント=クロワ教会（Église Saint-Sauveur et Sainte-Croix）、あるいはサン=ソヴール=ダントレーグ教会（Église Saint-Sauveur d'Entraygues）と言う。16 世紀の宗教戦争の際に大きな破壊を受けたが、聖堂の後陣部分などかろうじて被害を免れた部分もあり、全体的にロマネスク期の姿に忠実に再建されている。その後陣部分は、外部においては五角形の主後陣とその両側に背の低いやはり多角形の小後陣が並ぶ（小後陣は内部においては半円形平面である）。主後陣・小後陣ともに各面において、地上から持ち送りのすぐ下まで立ち上がる奥行きのある力強い半円形の壁アーチが付けられているが、これはロゼール（ジェヴォーダン）においてよく見られる仕様である。タルヌ溪谷では、サン=ジェ



48.7.1. Le Rozier

リー=デュ=タルンの後陣 (Saint-Chély-du-Tarn [48. 7. 11d.])、イスパニヤックの西ファサード (Ispagnac [48. 8. 12.]) などにそれが見られる。少し離れたところではロゼール中西部のレ・ゼルモー (Les Hermaux [48. 6. 15.])、また隣接するアヴェロン県のモステュエジュールのノートル=ダム=デ=シャン教会 (Église Notre-Dame-des-Champs de Mostuéjols) などを挙げるができる。こころ・ロジエでは、後陣の各ベイの壁アーチの中に左右を小円柱に挟まれた半円頭形の比較的大きな窓が開いている (中央のものが最も大きい。左右の小後陣では東面のベイのみに窓が開く)。窓の左右に付けられた小円柱の柱頭は幾何学的なブロックとなっていて、特に注目すべき装飾彫刻は見られない。

聖堂の北西の角にある鐘楼は 1696 年に建てられた。半円頭形の開口部 (ベイ) が 1 階部分には西と北の 2 面に、最上部では大きなものが 4 面すべてに開いている。この鐘楼はフランス革命の際に部分的に壊されたが、その後修復されたものである。その鐘楼と聖堂の南西に建てられた司祭館の間の奥にポルタイユが開いている。3 重の半円形ヴシュールからなるアーキヴォルト (19 世紀) が架かり、中央のヴシュールは左右両側で飾り気のない小円柱が受け止めている。タンパン彫刻はなく、ガラス窓がはめ込まれているだけである。ポルタイユの上には半円頭形の窓を背にして聖母マリアの白い像が置かれている。

聖堂内部は、大きく破壊される前のロマネスク様式で 1633 年以降に再建されたものである。正確には 12 世紀の建設当初のものではない。中央の主身廊の南北両側には、荒い石積みによる 3 本の円柱とそこに架かる 4 つの半円アーチからなるアーケードに隔てられて、幅の狭い側廊が並ぶ。主身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトであるが (白く上塗りされている)、側廊のそれは 4 分の 1 アーチのトンネル・ヴォールトとなっている (上塗りされずに石積みの様子がそのまま残されている)。北側廊の東端 (北側の小後陣の隣) には、ほぼ正方形の祭室 (15 世紀) が開いている。その各面の壁は尖頭アーチとなっていて、天井は 4 分交差リブ・ヴォールトである。ここは現在は聖具室として使われている。同じく北側廊にあっては西端部が、鐘塔の下 (1 階) の祭室 (丸くてがっしりした洗礼盤が置かれている) に接続しているが、側廊の幅がその祭室の 1 辺の幅よりも狭いために、祭室を取り囲むゴシック様式の尖頭アーチの 1 つの約半分近くが側廊外壁によって隠されてしまっている。その祭室の仕様は聖具室とほぼ同じで、天井にはやはり 4 分交差リブ・ヴォールトが架かる。

身廊の天井に唯一架かる半円形の横断アーチすなわち凱旋アーチ (壁付き円柱が無装飾の柱頭を介してそれを受ける) の東側には後陣が続く。この後陣部分が、最初に建設されたロマネスク期の雰囲気を最もよく伝えるものとなっている。主後陣は内部においてはゆるやかな五角形で、その各面には、基壇の上に立つ小円柱とその上に架かる半円形アーチが連なるアーケードとなっている。ただし、五角形のうち北面と南面では、アーチが 2 つずつ双子のように並ぶ (それぞれアーチの 1 つはニッチ)。アーケードを構成する小円柱の柱頭は、逆台形型の無装飾のブロックである。中央の 3 つのベイに開く半円頭形の窓は、内部に向けて隅切りされているが、下辺は階段状になっている。後陣には半ドームが載る (白く上塗りされてしまっている)。主後陣とその左右に並ぶ小後陣の間には、凱旋アーチのすぐ東側 (大理石製の祭壇が置かれた内陣部分) において、それぞれ半円頭アーチの狭い通路が開けられている。小後陣は 2 つとも

幅が狭く、半円頭形の窓が開けられているだけである。天井は上塗りされずに石積みがそのまま残されており、歴史的な古さをよく感じさせるものとなっていると言えよう。

Balmelle (1945) pp. 56-57. ; Buffière (1985) pp. 239-240, pp. 519-520, pp. 688-689. ;
Chabrol (2002) pp. 135-136. ; Chastel (1981) p. 19. ; Durliat et al. (1966) p. 136. ;
Nougaret et Saint-Jean (1991) pp. 297-298. ; Ribéra-Pervillé (2013) pp. 110-111. ;
Trémollet de Villers (1998) pp. 347-349. ; *RIP*.

48. 7. 2a. サン=ピエール=デ=トリピエノサン=ピエール教会

(Église Saint-Pierre, Saint-Pierre-des-Tripiers)

ル・ロジエからジョント川に沿って県道 D996 を東へおよそ 5 キロでル・テュルエルの集落に至り、そこから北へ急な登り道を 5 キロほど行くとサン=ピエール=デ=トリピエに着く。この集落の名前は、古くは《Sanctus Petrus de Stirpia》という地名に由来する。最近までサン=ピエール=デ=トリピエ (Saint-Pierre-d' Estripiés) とも呼ばれていた。この地には古代ローマ時代から集落があったが、中世期にはル・ロジエ修道院 [48. 7. 1.] が所有する小修道院とその付属聖堂があった（そのル・ロジエ修道院は、アニアヌの本院の管轄下にあった）。サン=ピエール教会は集落の南端に位置する。11 世紀終わり頃にル・ロジエの修道士たちによって建設され、もとは単身廊形式で後陣が 1 つ付だけの簡素なものであったが、13 世紀初め頃までに側廊と小後陣が付け加えられた。最後に身廊の最も西のベイが増築されたが、これはナルテクスの役割を果たすものであった。16~17 世紀には、他の多くの聖堂と同様に宗教戦争の影響で大きな被害を受けた。1635~1650 年の間に修復作業が進められ、ほぼ今日の姿となった。なおフランス革命に際しては、この地の神父ジャン=ジェロー・アルナル (Jean-Géraud Arnal) が革命政府と 1791 年憲法への宣誓を拒否して逃亡し、タルヌ溪谷の岩山の洞窟に隠れるが、結局は捕まってマンドで有罪判決を受けたのち、1794 年 7 月にメリユイス (Meyrueis) で処刑されている。

サン=ピエール教会は、建築的には後陣部分が最も古く、その平面プランは五角形で、大きさの異なる石を荒く積み上げて作られている。中央の最東面には隅切りされた半円頭形の窓が開く。左右の小後陣にはそれぞれ大きさの異なる小さな窓が付けられており、南側のそれはゴシック様式となっている。北側の側廊の外壁はきれいに整えられていて、半円頭形の大きな窓が内部の各ベイに対応する形で付けられているが、南側の外壁には小さな窓が不規則な高さに 2 つ開けられているだけである。聖堂北側では側廊は身廊の西の 3 つのベイに付けられていて、最も東側のベイに相当する外壁には地面まで降りる大きな半円形（よく見ればほんのわずかに尖頭形）の壁アーチが見られる。西ファサードとポルタイユは宗教戦争の後、17 世紀に



48. 7. 2a. Saint-Pierre-des-Tripiers

再建されたものである。西ファサードは3層からなり、一番上には三角形の頭頂部に鐘を吊すベイが1つだけ開いた鐘楼が載る。下層は左右両側を太い扶壁に挟まれて中央にルネサンス様式の方形のポルタイユが開く。その上には丸窓が付けられている。西ファサードが作られたのと同じ頃に、聖堂の南側に小修道院の建物が増築された。現在そこには司祭館と民宿があるが、それらは小さな方形の中庭を取り囲むようにして建っていて、これはかつての小修道院のクロワトル（回廊）の名残りであろう。司祭館は聖堂の外壁南側において西ファサードから連続する形で付属しているので、聖堂の南側外壁の西端部分は直接見るできない。

聖堂内部は4ベイからなる主身廊の南北に側廊を伴う3廊式で、東端には半円形平面の後陣が接続する。身廊と側廊の間は半円アーチが連なるアーケード壁であるが、最も西のベイはその幅が狭いこともあって、南北ともにアーチの大きさは小さい。主身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトで、半円形の横断アーチが架かる。一方、南北の側廊部分は両方とも4分の1の円筒ヴォールトとなっている。側廊の開口部は、外側は半円頭形であるが、内部にあっては隅切りされた大きな方形となっている。後陣（内陣）は奥行きがあり、水平のコーニスの上に半ドームが架かる。後陣と南北の小後陣は半円アーチの開口部でつながっている（ただしアーチの頭頂部の高さはわずかに異なる）。後陣の東端には半円頭形の小さな窓が開いていて、ステンドグラスがはめられている。後陣の中央には一段高くなったところに素朴でがっしりとした石造り祭壇が置かれている。聖堂内部は彫刻装飾の類いは見られない。北側廊の小後陣のそばに12～13世紀頃のものと思われる方形の石の祭壇板があるほか、主身廊の西端北側、すなわちポルタイユを入れてすぐ右側の壁に、正確な年代は不明であるが古い時代のもと思われる円筒形の石の洗礼槽が埋め込まれ、その横にマルタ十字を彫刻された円形の石版が置かれている。

Balmelle (1945) pp. 70-71.; Buffière (1985) p. 689.; Chabrol (2002) p. 135.; Trémolet de Villers (1998) pp. 345-346.; Verrot (1994) pp. 12-13.; *RIP*.

48. 7. 2b. サン=ピエール=デ=トリピエ/エルミタージュ・サン=ポン

(Ermitage Saint-Pons, Le Rozier) ▲

ル・ロジエ (Le Rozier) から北へおよそ3キロ、ロゼール県とアヴェロン県の境を流れるタルン川東岸 (ロゼール側) の山中の、切り立った岩壁に張り付くようにしてエルミタージュ (隠修所) の遺構が残っている。ここはメジャン台地 (Causse-Méjan) の西端にあたる。ル・ロジエから徒歩で山地ハイキング (ランドネ) コースをたどると、およそ4時間で到達できる。筆者にはついにその場所が確認できず訪れることができなかったが、この遺構については建築家フランソワ・ジェルメ=デュラン (François Germer-Durand, 1843-1906) による調査報告が残されている。それによると、この地には、もともとはロマネスク期以前から小聖堂があって、病気の子供の治癒を願う親がその子供を連れて訪れたという (Trémolet de Villers によれば、降雨祈願のためにも利用された)。聖ポン (聖ポンス) は、今のアルプ=ドゥ=オート=プロヴァンス県ウバイ渓谷地方などにおいてキリスト教の布教に努め、紀元3世紀半ばにシミア (今のニース) で殉教したとされる聖人であるが、中世には南フランスで広く崇敬され、とりわけト

ツールーズ伯領においても同様であった。今のエロー県東部にあるサン=ポン=ドゥ=トミエール（Saint-Pons-de-Thomières）の修道院はツールーズ伯によって936年に創建されている。実際このエルミタージュの遺構からはツールーズ伯レイモン5世の貨幣が発掘されている。現在この場所には、岩壁に張り付くようにしてかつての聖堂の壁が残されているだけである。壁には半円頭形の窓や、銃眼のような細長い開口部、半円形平面の小さな後陣の土台などが認められる。これらが建てられたのは11～12世紀頃と推定されている。
Buffière (1985) p. 689. ; Germer-Durand (1888) pp. I-IV, Trémolet de Villers (1998) pp. 345-346.

48. 7. 3a. ユール=ラ=パレード/ユールのサン=プリヴァ教会

(Église Saint-Privat de Hures, Hures-la-Parade)

今日のユール=ラ=パレードのコミューンは、1971年にユールとラ・パレードの2つのコミューンが合併して新しく作られたものである。ユール地区は、メジャン台地のほぼ中央にあり、ラ・マレーヌ（La Malène）から県道D16を約8キロ東進し、マ・ドゥ・ヴァル（Mas-de-Val）の少し手前で南のル・ビュフル（Le Buffre）方面に折れておよそ7キロ、標高およそ1000メートルの小集落である。11～12世紀のロマネスク期、この地にはサン=テニミー修道院 [48. 7. 11a.] 傘下の小修道院があった。その後、近隣の村の住民の増加とともに、付属聖堂も拡張されてきた。現在残るサン=プリヴァ教会は、集落を横切る県道D63のすぐ北にある。東側を墓地に囲まれ、西側（聖堂西壁）には司祭館が直接続く形で建っている。

聖堂は主身廊が12世紀後半にまでさかのぼるが、ペスト禍や百年戦争の混乱ののち、15世紀に身廊南側に、2ベイからなる側廊様の祭室が、そして18世紀には北側にも大きな側廊が増築された。さらに後になって、今度は後陣の北東側に聖具室が新たに付け加えられた。後陣と北側の側廊、そして聖具室の外部は近年になって白く上塗りされたが、南側の側室外壁は石積みそのまま見える。この南側の側室にはゴシック様式の大きな窓が2つ開いており、また東面下部に半円アーチのアルコソリウム（壁龕墓、arcosolium/enfeu）が付けられている。後陣と聖具室の東面には半円頭形の細長い窓が開けられている。北側の側廊外壁には、わずかに上部が扁平アーチとなった縦長の窓が4つ並んでいる。鐘楼は身廊の最も東のベイの上に建てられているが、これはもともとあった小さな鐘楼（鐘を吊すベイが2つ並んでいた）が、フランス革命の際に破壊された後、1848年に新たに作られたものである（現在のものは鐘のベイは4面にそれぞれ1つずつ）。ポルタイユ（扉口）は16世紀のもので、主身廊の最も西のベイの南側に開いている。半円アーチの2重のヴシュールはそのまま左右の基壇まで下りる。このポルタイユの半円アーチは、すぐ外側をゴシック様式のモールディングに縁取られている（左右の端は形が異なる）。このモールディングには耳の長い動物（イヌか）と、まるでカツラ（あるいはベール）のような形の長い髪を持つ人間の顔の彫刻が残されている。ポルタイユのすぐ上には丸窓が開けられている。またこのポルタイユの右手（つまり増築された南の側室の西面壁）には、やはり半円アーチを持つアルコソリウムが見られる。

量塊感のある聖堂内部は、主身廊が3ベイからなり、その天井は、わずかに尖頭形となった

横断アーチの架かる半円筒形トンネル・ヴォールトである。身廊の西壁（ポルタイユを入れて左側）の上部には、半円頭形のスリムで細長い窓が残されている。聖堂のすぐ隣が司祭館なのでこの窓自体は埋められているが、内部に向けて大きく隅切りされたその仕様は、12世紀ロマネスク様式の美しさをよく伝えるものである。西壁の下部にはかつてそこに開けられていた半円頭形の出入口の痕跡が見て取れる。身廊部と内陣を隔てる凱旋アーチは、身廊のヴォールト頭頂部から大きく下がったところに架かる。すなわち南北の側廊・側室に付けられたアーケードのアーチと同じ高さで、左右から内部へと張り出した側柱がそれを受ける。トランセプト交差部とも言える内陣には、四隅に細長い円柱が立ち、その上に交差リブが付けられたクーポール（円蓋）が載る。内陣中央には逆台形の台座の上に円盤形の石の祭壇が置かれている。聖堂最東端の後陣は半円形平面で、半ドームが交差部（内陣）の天井よりも低い位置に架かる。この後陣には、東面に隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓と、南面に方形の窓が開けられている（北面にはない）。



48. 7. 3a. Saint-Privat de Hures

主身廊南側の2ベイからなるゴシック様式の側室（15世紀）は、天井が交差リブ・ヴォールトとなっており、リブは各ベイの4隅にあるキュ・ドゥ・ランプ（cul-de-lampe／コーベル、持ち送り）が受ける。それぞれ人面などの彫刻が施されているが、北西隅のそれは髑髏である。各ベイには尖頭形の窓が開いている（大きさは異なる）。主身廊北側の3ベイからなる側廊（18世紀）はリブのない交差ヴォールトで、各ベイには内部に向けて大きく隅切りされた扁平アーチの窓が開けられている。側廊西端には白のような円筒形の洗礼槽（年代不明）が置かれている。

Balmelle (1945) pp.21-22.; Buffière (1985) p.561, pp.687-688.; Nougaret et Saint-Jeant (1991) p.287.; Trémolet de Villers (1998) pp.343-344.; *RIP*.

48. 7. 3b. ユール=ラ=パレード／ラ・パレードのサン=ティレール教会

(Église Saint-Hilaire de La Parade, Hures-la-Parade)

ユール=ラ=パレードのコミューンを構成するラ・パレードの集落は、ラ・マレーヌ（La Malène）から県道 D43 と D986 を通って南へ 10 キロ、東に位置するユールの集落へは D63 でおよそ 8 キロである。サン=ティレール教会は集落の西端にあつて、聖堂の北側は墓地となっている。

ラ・パレードのサン=ティレール教会は、1227 年の史料においてマンド司教の所有するものとしてその名前が出てくる。建設されたのは 12 世紀後半頃と思われるが、17 世紀に身廊部や凱旋アーチに大々的な改修の手が加えられた。建築的には、後陣内部の意匠などにおいてサン=シェリー=デュ=タルンのノートル=ダム教会（Saint-Chély-du-Tarn [48. 7. 11d.]）と類似性が認められる。

後陣は外部にあっては五角形で、開口部は中央に半円頭形で縦に細長い窓が、さらに南北面にはやはり半円頭形であるが中央のものよりも大きな窓が開けられている。後陣の北東面には半円形のアーチ（ニッチ）が付くが、聖具室が増築されているので後陣の北側をすべて見ることはできなくなっている。また後陣の南東面にはその面と同じだけ幅を持ち最上部まで立ち上がる大きな扶壁が付けられているのが目を引く。聖堂の南北の壁にはそれぞれ扶壁が2つ付けられているが、そのうち西側に付けられている扶壁は南北ともに三角形となっている。聖堂本体と比べると非常に大きく見える方形の鐘楼（尖頭が載る）は19世紀中頃のものである。

聖堂内部は単身廊形式である。天井は尖頭形のトンネル・ヴォールトで、同じく尖頭形の横断アーチによって4つのベイに区切られている。最も西のベイは19世紀半ばに鐘楼とともに増築されたものである。身廊の最も東（内陣のすぐ西側）のベイには南北にそれぞれ奥行きが短い半円形ヴォールト天井の祭室があって、言わば小規模なトランセプトを形成している。そのうち北の祭室の東側の壁には14世紀（一説には17世紀）のフレスコ画の一部が残されている。描かれているのは赤いマントを着た人物の上半身で、聖ローラン（ローマの聖人ラウレンティウス）と見られている。後陣内部（内陣）は五角形で、各面にそれぞれ半円アーチが1つずつ並ぶアーケードとなっており、5つのアーチは、およそ1.2メートルの基壇の上に立つ柱頭彫刻付きの4本の小円柱が支えている。それらの柱頭彫刻は図形的なごくシンプルなものである。後陣の中央の面には、半円アーチとそれを支える左右の小円柱の中に、内部に向けて大きく開く半円頭形の美しい隅切りを施された細長い窓が開いている。向かって右端と左端の面には、中央のものよりも大きめの窓があって採光の役割を果たしている。半円アーチの連なるアーケードの上には水平のモルディングをへて半ドームが架かる。この後陣が、現在でも聖堂建設当時のロマネスク期の雰囲気最もよく残されている味わい深い部分である。



48. 7. 3b. Saint-Hilaire de La Parade

Buffière (1985) p.688.; Nougaret et Saint-Jeant (1991) p.287.; Trémolet de Villers (1998) p.344.; Verrot (1994) p.46.; *RIP*.

48. 7. 3c. ユール=ラ=パラドノレ・ドゥーズのサン=ジェルヴェ礼拝堂

(Chapelle Saint-Gervais des Douzes, Hures-la-Parade)

ル・ロジエからロゼール県とアヴェロン県の県境をジョント川に沿って走る県道 D996 をおよそ7キロ東に向かう。県道沿いのレ・ドゥーズ (Les Douzes) の集落からさらに500メートルほど徒歩で山道を北へ登ると、ジョント溪谷を見下ろす高台に出る。この高台では20世紀になって古代の骨壺などが発掘されており、ここが古くから近隣住民の墓所であったことがうかがえる。

サン=ジェルヴェ礼拝堂は小さくてシンプルな形をしている。ポルタイユはもとは聖堂の南側にあったが、現在は半円頭形の大きなものが西ファサードに開けられている。その上にはやはりシンプルで高さのある大きな鐘楼が載っている。聖堂の本体自体が小さめなものなので、相対的にポルタイユや鐘楼がいつそう大きく見える。聖堂内部はいたってシンプルで、2 ベイからなる身廊の上に、半円形の横断アーチによって区切られた半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる。凱旋アーチの東側には半ドームが載る半円形平面の後陣が続く。

聖ジェルヴェ（聖ジェルヴァシウス）は、聖プロタシウスとともに2世紀に殉教したミラノの守護聖人である。礼拝堂の北側には古くからの墓地（今日でも使用されている）が広がっている。

Buffière (1985) p.688.; Trémolet de Villers (1998) pp.345-346.

48.7.4. ル・ルクー／ノートル=ダム教会 (Église Notre-Dame, Le Recoux)

ル・ルクーの集落は、ロゼール県南西部のラ・カヌルグから県道 D267 と D67 をへて南へおよそ 15 キロ、ル・ロジエからだ県道 D32 と D67 を北へおよそ 20 キロにあり、ノートル=ダム教会（またはノートル=ダム=デュ=ロゼール教区教会／Église paroissiale Notre-Dame-du-Rosaire）はこの集落の南西端の墓地の中に建っている。中世期、この地にはジェヴォーダン副伯の城があったが、これは後に、現在のアヴェロン県のセヴェラック（Sévérac-le-Château）の領主の所有するところとなった。ノートル=ダム教会は、この城に付属する城塞教会であったと考えられている。15世紀にはマンド司教の管轄する荘園支配（マンズ）に組み込まれた。

聖堂を見た時の最初の印象は、墓地に面した多角形の後陣部分の上に乗る方形の鐘塔の大きさである。ロマネスク期の五角形の後陣よりわずかに小さいだけの後代の鐘楼が、しかも尖頭部分を含めるとその下の後陣部より高さがある、後陣-鐘塔に比較して聖堂身廊部の低さがよりいつそう強調されるかのようなのである。この五角形の後陣の各面には、横幅のある半円頭形の壁アーチが地面からおよそ 1.5 メートルの高さから立ち上がり（外側に向けて隅切りされるように傾斜した水平面の上にニッチのように付けられている）、その中央には細長くて幅の狭い半円頭形の窓が開いている。こうした後陣の意匠は、ガブリアス（Gabrias [48.6.4.]）においても見られるものである。ここル・ルクーでは、後陣部の細長い窓の半円頭部のアーチ石は、壁面の石とは異なって濃い茶色の石が装飾的に用いられているのが特徴的である。また五角形の後陣の各面は壁アーチの上に、石を取り除いた穴が壁面装飾のように等間隔に並んでいる。壁アーチから上の部分は、ロマネスク期以降に高さを加えられたものと思われる。後陣の南面には、この増築部分に付けられた小さな出入口に登るための石段があるが、その石段の一番下の段は、地面に埋



48.7.4. Le Recoux

められた半円形の古い石版（マルタ十字が彫刻されている）の上に乗っている。

聖堂の南側の壁には三角屋根で内側が半円筒ヴォールトとなった大きなポーチがあり、その中に 20 世紀に新しく付けられた半円形アーチの架かるポルタイユ（扉口）が開いている。聖堂の中には何段か石段を降りて入る。聖堂内部は古い石積みがそのまま残されていてロマネスク期の雰囲気をよく伝えるものとなっている。身廊には横断アーチで区切られる形で半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かり、ヴォールトの下には身廊に沿って半円頭形の壁アーチが並ぶ。身廊の北側には 3 つ、南側には 2 つの小礼拝室が並ぶが、これらはロマネスク期のものではない。それぞれの礼拝室の壁には半円頭形の窓が開く。凱旋アーチ（arc triomphal）の西は後陣部となり、半ドーム（cul-de-four）が架かる。後陣の内側は五角形で、各面に半円形アーチが付き、それらのアーチはロマネスク期の小円柱に支えられている。後陣の 5 つの面のうち中ほどの 3 つの面に、内部に向けて隅切りされた細長い窓が開いている。後陣部の最も南側の面は後代のものであって、ロマネスク期のものではない。聖堂西端の平面の壁には、丸窓が 1 つ開けられているだけである。

Buffière (1985) p. 641. ; Durliat, et al. (1966) p. 133. ; Trémolet de Villers (1998) p. 362.

48.7.5. ル・マッスグロノイノスのサン=マルタン旧教区教会

(Église Saint-Martin d'Inos, Le Massegros)

ル・ルクーから県道 D67 を南へ約 5 キロでル・マッスグロの集落となり、そこから県道 D32 を 500 メートルほど南に進み、左に折れる間道をさらに 700 メートルほど行くと、古いイノス（またはイノ）の集落に至る。この地は中世期にはル・ルクーと同様にセヴェラック（Sévérac-le-Château）の領主の支配地であった。サン=マルタン教会は 1912 年まで教区教会であったが、19 世紀に人口が増えたル・マッスグロのコミューンの中心に新しい聖堂が建設され、そちらが教区教会とされた後は打ち捨てられて荒廃した。現在は個人所有となり、一部が所有者の住居に作り替えられている。

聖堂は、イノスの中ほどの小さな広場（キリスト磔刑の十字架が立っている）のすぐ北側の民家の奥にある。高さの低い尖頭が載った方形の鐘楼がすぐに目に入る。3 層からなっていて、最上部には 4 つの各面に半円形アーチのベイが開いている。聖堂のポルタイユ（扉口）は 19 世紀頃のもので、鐘楼の南側下部に付けられた半円頭形ポーチの中に開いている。聖堂は全体的にロマネスク後期からゴシック初期、すなわち 12 世紀後半～13 世紀頃にかけての建築であると思われる。2 ベイからなる単身廊形式で、南北にそれぞれ祭室が付く。北側のそれと身廊はゴシック様式の尖頭アーチで区切られ、交差ヴォールトが架かっている。地面には碑文の彫刻された（ただし摩耗が進んだ）14～15 世紀頃のものではないかと思われる 2 つの墓石が埋められている。いっぽう南側の祭室は身廊とは半円アーチで区切られ、天井は交差ヴォールトとなっている。身廊部の水平のコーニスから上の天井はすべて崩落していて現存しない。後陣（内陣）は、外部ははっきりそれと分かる五角形であるが、内部は半円形平面に近く、中央には内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開いている。そのすぐ左右両側にはやはり半円頭形で

大きめの窓が開く。内陣と身廊の間にあった凱旋アーチは失われているが、それを受けていた柱頭彫刻を伴ったピラストルの付け円柱は、地面まで降りずに途中までで止まり、あたかも長いキュ・ドゥ・ランプであるかのようなものである。同様の仕様はここから直線距離にしておよそ 5 キロ北東にあるサン=ジョルジュ=ドウ=レヴェジャック (Saint-Georges-de-Lévêjac [48.7.6.]) でも見ることができる。南側の柱頭には、花卉彫刻が施されている。南北の祭室のすぐ西側の付け円柱の柱頭彫刻は摩耗しており文様は判別できない。北壁の西側のベイにはニッチで縦長のアルコソリウム (壁龕墓) が見られる。身廊の西端は、この聖堂の現在の所有者の住居に改造されている。その所有者によれば、コミュニオンはこのサン=マルタン教会の保存にはあまり熱心ではなく、このままではさらなる荒廃が危惧されるという。自治体 (コミュニオンあるいは県) による、今後の歴史遺産保存の動きがぜひとも待たれるところである。



48.7.5. Inos

Balmelle (1945) p.22.; Trémolet de Villers (1998) pp.361-362.

48.7.6. サン=ジョルジュ=ドウ=レヴェジャック/サン=ジョルジュ教会

(Église Saint-Georges, Saint-Georges-de-Lévêjac, Massegros-Causses-Gorges)

レ・ヴィーニュから県道 D46 を北へ約 11 キロ、ラ・カヌルグからだ県道 D988 と D32 を南へ約 22 キロである。サン=ジョルジュ教会は、集落の中ほどにあり、南側は墓地になっている。伝説によれば、この地は 6 世紀頃からマンド司教ヒラリウス (聖イレーヌ/Saint-Hilaire) がキリスト教の布教に努め、聖ペトロに捧げられた小さな礼拝所を作ったと言われる。それは近隣の住民たちの信仰を集めたが、その役割は 12 世紀には新たに聖ジョルジュ (ゲオルギオス) に捧げられた聖堂と小修道院に取って代わられた。サン=ジョルジュ小修道院は、1155 年以前はレ・ヴィーニュ周辺の他の小修道院と同様に、マルセイユのサン=ヴィクトール修道院に属するものであったが、その後マンド司教の管理下に入り、さらに付属聖堂はマンドのコレージュのものとなった。

現在残るサン=ジョルジュ教会には、これまでも多くの改修の手が加えられてきた。まず目につくのは、後陣の上に作られた大きな方形の鐘楼で、南北面には鐘を吊すベイがそれぞれ 1 つずつ、東面には 2 つ開いている (西面にはない)。その上は尖塔屋根である。またこの鐘楼の東南の角には円塔が付けられている。鐘楼から 19 世紀の門をくぐって聖堂の南側に回ると、そこには大きなポーチ (内側は尖頭アーチ) があって、その中には 1841 年に作られた四角いポルタイユが開いている。内陣部分の南北には三角屋根でトランセプトを形作る祭室があり、聖堂南側では、その祭室とポーチの間に、ロマネスク期の半円頭形の壁アーチとその中にやはり半円頭形の窓が残されているのが見て取れる。ポーチの向かって左側には住居が続いていて、聖

堂の西壁を直接見ることはできない。

聖堂内部は単身廊形式で、横断アーチによって3つのベイに区切られ、その天井に架かるヴォールトならびに横断アーチは尖頭形である。横断アーチの両端は、床面まで降りてこない短円柱形のキュ・ドゥ・ランプ（持ち送り）が受け、その底部には人面彫刻が施されている。このような仕様は、宗教戦争期以降の改修の際に用いられたもので、ロゼールではオーモン・オブラック [48. 2. 1.] やグランリュウ [48. 3. 4a.] などにおいて同様のものが見られる。トランセプトを形作る南北の祭室は、やはり尖頭アーチによって身廊側に開いており、祭室自体の天井は尖頭形ヴォールトである。縦幅のある凱旋アーチから東の内陣（後陣）部分は方形で、天井には交差しブ・ヴォールトが架かる。三角形の切妻形上部を持つ19世紀の祭壇が東端部に置かれている。横断アーチや身廊部分と内陣の間に架かる凱旋アーチ、後陣に架かるリブ以外の壁面は、天井部分も含めてすべて白く上塗りされており、堂内がきれいに整えられているという印象は与えるが、歴史的な古さが醸し出すロマネスク的な雰囲気は、残念ながら失われてしまっている。

なお、サン=ジョルジュ=ドゥ=レヴェジャックから県道 D46 をおよそ8キロ北へ行つたところにラ・ピギエールの集落があり、その北寄りのところにサクレクール教会 (Église du Sacré-Cœur de La Piguière) がある。台形の後陣、半円頭形の窓、尖頭屋根の載った方形の鐘塔とその下に付けられた半円頭形のポルタイユなど、一見してロマネスク様式を部分的に残した聖堂であるかのような印象を受けなくもないが、実際の建設は1867年である。内部は身廊壁面、後陣の半ドーム、横断アーチとそれを受けるピラストル（壁付き円柱）などが、すべてきれいに彩色されている。

Buffière (1985) p. 643.; Trémolet de Villers (1998) pp. 359-361.; *RIP*.

48. 7. 7a. レ・ヴィーニュ/サン=ブレジェ=デュ=タルン教会

(Église de Saint-Préjet-du-Tarn, Les Vignes)

レ・ヴィーニュの集落は、タルン渓谷 (Gorges du Tarn) におけるロゼール県側の最南端に位置し、ル・ロジエからは、県道 D907 を北へおよそ10キロである。タルン渓谷の険しい斜面に東西を挟まれている。レ・ヴィーニュの集落から橋を渡ってタルン川の左岸（東岸）に渡り、川沿いに細い道を600メートルほど北に向かうとサン=ブレジェ=デュ=タルン教会に至る。聖堂はタルン川をすぐ下に見下ろす河岸に建っていて、その東側は墓地となっている。小規模なプロポーションに三角屋根のポーチ、彫刻装飾の施された後陣など、聖堂が見せる端正なその姿は、ジェヴォーダンでもとりわけ美しいものの1つに数えられるであろう。

聖ブレジェ (Projectus) はオーヴェルニュ出身で、655年にクレルモンの司教となった。オーヴェルニュで布教活動を行い、同時に多くの修道院や施療院を創建したと言われるが、その名声を妬んだ貴族たちによって676年に殺された。言い伝えによると、頭蓋骨をたたき割られるというむごたらしい死であったとされる。この聖堂が聖ブレジェに捧げられていることや、聖堂の東側で7世紀のものであると思われる墓が見つまっていることから、この聖堂はもともとはメロヴィング時代にまでさかのぼるものであると考えられる。現在の聖堂が建設さ

れたのは11世紀頃であり、12世紀半ばには Dolan や Le Combe といった周辺の聖堂とともに、マルセイユのサン=ヴィクトール修道院に属した(1155年)。その後、マンド司教の所有となっている。

聖堂は、東西の軸線から少しずれていて、後陣はイェルサレムのある真東ではなく北東を向いている。これはこの聖堂が建つ狭い河岸(しかも少し傾斜している)という地形的な事情によるのであろう。実際、西ファサード側から見ると、聖堂は地面の傾斜に合わせて北側の壁の高さが南側のそれより少し長くなっ



48. 7. 7a. Saint-Préjet-du-Tarn

たいびつな台形をしている(上部は三角屋根)。聖堂北側の壁は、複数の扶壁で強化されている。南側には扶壁は見られない。これはこの聖堂が建つ地面がわずかに南から北へ(正確には南東から北西方向へ)と傾斜しているために、北西側への圧力による北壁の崩落を防ぐことを目的としているためである。聖堂北壁では、東寄りの2つの扶壁の間に19世紀半ばに増築された祭室(半円頭形で縦長の窓が開く)があるが、聖堂の南側においては、扶壁の代わりに壁面の全体にわたってあたかもロンバルディア帯のように、半円頭形で縦長の壁アーチ(ニッチ)がアーケードをなして並んでいる。西寄りの壁アーチは後代に半円頭形の窓が開けられたことで壊されてしまっているし、東寄りのそれは増築された祭室によって上部のアーチだけを残して失われている。半円形の後陣は、上部の持ち送りにロンバルディア帯が巡らされており、それを構成する半円アーチは全部で12あり、4つずつ一組にまとめられている。それらのアーチのモディオンにはさまざまな彫刻装飾が施されている。四角い形をした奇妙な人面、まるでハンドバッグのような形をした樽、動物の頭、渦巻き状の丸い花卉など。後陣のロンバルディア帯の下には、半円頭形の壁アーチの中にやはり半円頭形の窓が3つ開いている。かつてそれらの窓の両側にはそれぞれ、壁アーチを左右で支えていた小円柱があったが、今はインポストが残るのみである。後陣と身廊の間には、ベイ1つだけのシンプルな鐘楼が立つ。正確な年代はよく分かっていないが、これも19世紀あるいはそれよりも少し前の時代のものではないかと思われる。こうした鐘楼は高オーヴェルニュ地方にもよく見られるものである。

聖堂の西ファサードには三角屋根で内側の上部が半円筒ヴォールトとなった大きなポーチが付けられている。これもトランセプトを形作る南北の祭室同様に19世紀のものである(もっと古い時代のもとの見方もある)。聖堂のポルタイユ(扉口)はポーチの奥にあり、その半円アーチは左右において基壇の上に載った少し太めの円柱が受ける。円柱の柱頭部は無装飾である。いっぽう、ポーチの上にも、半円頭形の窓が開いている。窓は2重の半円アーチに縁取られており、左右を柱頭彫刻付きの小円柱に挟まれている。その柱頭彫刻は、下から上へとV字状に広がる線刻的な植物の葉の中に小さな花卉が付いたもので、さらにその上の冠板の彫刻は、向かって右側のものは大小の丸い玉がきれいに横に並べられているが、左側ではそれとは異な

り、渦巻き形や放射形の花弁がかわいらしく5つ並べられている。

ポーチから聖堂内部に入ると、そこは4ペイからなる単身廊形式となっている。身廊の東に続く内陣の南北に小さな祭室が付くので、その部分がトランセプト交差部であると言える。この内陣部分が、時代的には最も古いものである。内陣部分を取り囲む後陣は半円形平面であるが、普通後陣に付けられるものとしては比較的太いと言える円柱が4本床から立ち上がり、その上に5つのアーチが架けられてアーケードを形作っている（両端のアーチの片側には円柱はない）。アーケードの上には半ドームが載っている。これらの円柱の柱頭彫刻はウロコ状に重なる植物の葉飾りである。アーケードの中央とその左右の3面に、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられていて、それぞれの窓の左右両側には細長い小円柱が付けられている。後陣部分における、太くて長い円柱と開口部の左右に付けられた小円柱という、こうした組み合わせは、他ではあまり見る事のない珍しい仕様であると言えよう。なお、後陣中央の窓にはめられたステンドグラスに見られるのは、頭に傷を負い、シュロの葉と剣を持った聖プレジエの姿である（その左右のステンドグラスはペトロとパウロである）。20世紀初め頃までは、後陣に架かる半ドームにも聖プレジエを讃えるルネサンス期のフレスコ画が描かれていたが、残念なことに今日では失われている。身廊の南側には半円形の壁アーチが付けられている。また西壁（西ファサードの裏側）の上部には、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられていて、その両側には小円柱が添えられている。

なおレ・ヴィーニュの集落から県道 D907 をタルン川に沿ってさらに北へおよそ 1.8 キロ行ったところに、「パ・ドウ・スシ」（Pas de Soucy）と呼ばれる岩場がある。ここは、後述する聖エニミーがジェヴォーダン司教イレールとともに悪魔の化身であるドラゴンを退治したと伝えられる場所である。現在では、タルン溪谷のこの急流をすぐ下に見下ろすことのできるテラス（有料）が設けられている。

Balmelle (1945) pp. 71-72.; Buffière (1985) p. 645.; Nougaret et Saint-Jeant (1991) p. 300.; Trémolet de Villers (1998) pp. 351-353.; Verrot (1994) p. 11.; *RIP*.

48.7.7b. レ・ヴィーニュ／ドランの城塞礼拝堂 (Chapelle castrale de Dolan) 遺構

レ・ヴィーニュの集落から県道 D995 の急坂を西へ約 2 キロ登ったところから細い私道に入り、さらに 300 メートルほど進む。険しいタルン溪谷を見下ろすようにして城塞の廃墟が残っている。ただし城塞自体は私有地の奥にあるために今はアクセスできない。ドラン城塞 (Castel de Dolan) は、ジェヴォーダンにおいて最も古いものの 1 つであると言われる。11 世紀にはルエルグ・セヴラックの領主の所有であった。セヴラックの領主は、13 世紀にはマンド司教 (エティエンヌ 2 世・ドウ・ブリウド) に臣従している。現在、この城塞の塔、城主の居館、井戸などの遺構が残されており、城塞礼拝堂もあったとされている。この城塞を西側から見た時にまず目に入るのは、大きな西壁の遺構である。それに対する東側の壁には、内部に大きく隅切りされた半円頭形の細長いロマネスク様式の窓が残されている。これは聖堂建築でよく見られるものであるが、実際にこの部分が城塞礼拝堂のものであるかどうかについては明確なことは言えない。

48.7.8. サン=ローム=ドゥ=ドラン/サン=ローマン教会

(Église Saint-Romain, Saint-Rome-de-Dolan)

レ・ヴィーニュから県道 D995 を西へ向けて登る。ドラン城塞に向かう間道への分岐からさらに 4 キロほど進むとサン=ローム=ドゥ=ドランの集落に至る。レ・ヴィーニュからおよそ 6 キロである。サン=ローマン教会は、12 世紀にはマルセイユのサン=ヴィクトール修道院の所有する小修道院付属聖堂であったが、13 世紀にはル・ロジエ修道院に属していたようである。宗教戦争の際、プロテスタント勢力によって大きな被害を受け、17 世紀に再建されたあと幾度となく改修の手が加えられてきた。尖塔屋根を頂く方形の鐘楼は 19 世紀のものである。また三角屋根の側室が連なる聖堂南側の、一番西端に半円アーチの大きなポーチが開き、その奥に 1877 年のポルタイユが開いている。聖堂の西側にはかつて小修道院の建物が建っていたと思われるが、現在は住居(司祭館)が接続していて聖堂の西壁は見ることができない。一方、聖堂東端は飾り気のない台形の後陣となっていて、中央の面には上部に丸窓が付けられているだけである。

聖堂内部は、改修が繰り返されてきたにもかかわらず、不規則な大きさの石が荒く積まれている様子がそのまま残されていることもあり、ロマネスク期の雰囲気がよく復元されていると言える。単身廊形式で、天井はわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトである。身廊の南北には交差ヴォールトが架かる側室が付き、トランセプトを構成している。この側室は南北に 2 つずつ並ぶが、内陣部分の南北にあたるそれぞれ東側の部屋は、扉の付いた聖具室となっていて身廊側には開放されていない。主身廊奥の南北の壁付き円柱の上に横断アーチが架かり、そこから東が内陣である。その内陣を取り囲む後陣の壁は 3 面からなる(内陣の南北に付けられた側室の壁を含めると 5 面)。中央の面には内部に向けて隅切りされた丸窓が開けられ、その両側の面のやはり隅切りされた半円頭形の大きな窓とともに採光の役割を果たしている。内陣中央には方形の石の祭壇が逆台形型の台座石に載せられている。聖堂内部の西端には、今は木製の二階席が設けられている。聖堂内部には(外部も含めて)彫刻装飾の類いは見られない。Trémole de Villers (1998) p. 351.

48.7.9. ラ・マレーヌ/サン=ジャン=バティスト教会

(Église Saint-Jean-Baptiste, La Malène)

ラ・マレーヌの集落は、ロゼール県南西端のアヴェロン県境ル・ロジエからタルン渓谷沿いに県道 D907 をさかのぼること約 10 キロ、サン・テニミーからだ南へ約 25 キロ、ちょうど県道 D43 が県道 D907 と交わりタルン川を橋で渡る地点にあたり、昔からこの渓谷を行き来する旅人や商人たちの宿場としての役割を果たしてきた。現在でもソヴテール台地やメジャン台地を歩く山地ハイカー(ランドネ)たちの中継基地である。また夏期にはカヌーなどを楽しむ人々で賑わう。集落はタルン川の右岸(北岸)の川岸から斜面に沿って広がっている。その歴史は古く、集落を見下ろす大きな岩山(La Barre)には、頂上から南東斜面にかけて、古代末期の 4 世紀後半からメロヴィング時代の 7 世紀頃まで存続していた《Castel Merlet》または単に

《Castellum》と呼ばれる城塞の遺構が見つかっている。そこでは居館の他に、浴場施設や穀物倉庫、地下クリプトらしき遺構などが発掘されている。ラ・マレーヌの集落の中心には、尖頭屋根を頂く厳めしい円塔が付いた15世紀の「モンテスキューの城館」（Manoir de Montesquiou）が建っている。この城館を所有していたモンテスキューの一族は、フランスでも有力貴族の一つに数えられる。17世紀になって国王ルイ13世がこの城館を破却しようとするが、モンテスキュー家の王国への貢献に免じてこの館は残されることとなった。現在は観光客を受け入れるホテルとして存続している。



48.7.9. La Malène

洗礼者ヨハネに捧げられた聖堂は、モンテスキューの城館とは県道D43をはさんで反対側の集落の西の斜面に、北側を墓地に囲まれる形で建っている。おそらくはサン＝テニミーの修道士たちによって12世紀に建設されたが、13世紀の史料ではマンド大聖堂の聖堂参事会に属するものとしてその名が見いだせる。五角形の後陣（中央の3つの面に半円頭形の窓が開く）と、その左右に並ぶ半円形の小後陣、背の低いシンプルな方形の鐘楼、南北の側廊の外壁に半円形の壁アーチが並ぶアーケードなど、全体的に端正でバランスの取れたその姿は、ロマネスク聖堂の魅力を今によく伝えていると言えよう。聖堂内部は三廊式身廊となっているため、西ファサードは横幅がある。ポルタイユ（扉口）および、その上に2つ並ぶ細長い半円頭形の窓を含める形で、それ自体を大きな扶壁と見ることのできる方形の張り出しが付いており、しかも西ファサードの左右の両端も扶壁で強化されていることもあって、このファサードは非常に安定した印象を与える。1601年に改修されたポルタイユは、一番外側のアーチも含めて4重の半円形アーチが重なるアーキヴォルトの下に開いている。

身廊は3ベイからなるがその幅は狭く、そのぶん相対的に高さを感じさせる。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、ベイを区切る横断アーチは、高さのある方形のピラストルが受ける。半円形の大きなアーチが連なるアーケードを介して主身廊と並ぶ南北の側廊も、天井は同様に半円筒形トンネル・ヴォールトで、方形のピラストルに支えられた半円形の横断アーチによって区切られている。北側廊の東端のベイには、さらにその北側に交差ヴォールトが架かる祭室が19世紀になって増築されている。その部屋は、フランス革命の際に Marc Antoine Charrier 率いる王党派の軍に参加したために、その後革命政府によって1793年6月11日にフロラックでギロチンにかけられた21名のラ・マレーヌの住民に捧げられており、それを記した大理石の墓碑板が置かれている。後陣はこの聖堂で最もよくロマネスク期の様子を伝えるものとなっている。主後陣は身廊の東西軸からほんのわずかにずれている。内部は五角形で、その上にコーニスなしに半ドームが載る（主身廊ではヴォールトの起点にコーニスが巡る）。五角形のうち中央の3つの面に、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開いており、そ

の窓は半円アーチと方形の小ピラストルによって縁取られている。南北の側廊の東にそれぞれ左右の小後陣が続く。内陣とは半円頭形アーチの通路でつながっている。また半円頭形の窓が開けられ、ステンドグラスがはめ込まれている。後陣部を含めて、この聖堂には彫刻装飾の類いはまったく見られないが、それゆえにむしろ素朴でシンプルな美しさが強く感じられるのである。

Buffière (1985) p. 520.; Balmelle (1945) pp. 31-32.; Chabrol (2002) p. 135.; Chastel (1981) pp. 13-14.; Durliat, et al. (1966) p. 81.; Trémolet de Villers (1998) pp. 354-356.; Trintignac, Alain (2012) pp. 317-328.; Verrot (1994) pp. 12-13.; Werth (2013) p. 140.

48. 7. 10. マ=サン=シェリー／サン=コム礼拝堂 (Chapelle Saint-Côme, Mas-Saint-Chély)

ラ・マレーヌから県道 D43 と D986 を東へおよそ 10 キロでコペルラック峠 (標高 907 メートル) となり、そこからさらに東へ折れて約 2 キロでマ=サン=シェリーの村に至る。サン=コム礼拝堂へは、この村から南西へと続く山地ハイカー (ランドネ) 用の山道をトゥレル山に向かって約 1.6 キロ登る。マ=サン=シェリーの村から礼拝堂まで徒歩で往復約 2 時間の距離である。かつてマ=サン=シェリーにあった小修道院は、そこから北へ約 10 キロのサン=テニミー修道院によって創建されたので、サン=コム礼拝堂もおそらくはサン=テニミーの修道士たちによって建てられたのであろう。古くからこの地域を訪れる巡礼たちの多くが立ち寄ったとされる。メジャン台地の木々の少ない荒涼とした尾根がどこまでも見渡せる標高およそ 1000 メートルの高原にあって、この素朴で愛すべき小さなシャペルの姿は孤高で美しい。

最初に建設された正確な年代はよく分からないが、幾度となく改修を加えられたにもかかわらず、聖堂は端正なロマネスク様式をよく保っている。小さくて背の低い方形の身廊には三角屋根が載り、身廊と同じ幅の半円形の後陣が東側に付いている。身廊と後陣の間にはベイが 1 つだけの方形の鐘楼が立ち、さらにその上に十字架を冠した小鐘楼が付けられている。方形の鐘楼には 19 世紀初めには、14 世紀の鐘が吊されていたというが、今はない。半円頭アーチのポルタイユ (扉口) は、聖堂の西ファサード中央にあって、その真上にはまるで銃眼のような細長い開口部が付けられている。後陣内部の天井は半ドームとなっている。

サン=コム (聖コスマス) は、双子の兄弟であるサン=ダミアン (聖ダミアノス) とともに、4 世紀初め頃ディオクレティアヌス帝治世下の小アジア南部キリキアで殉教した聖人である。無報酬で医療を施し、信仰の力で患者の病を癒やしたとされ、サン=コムは外科医の守護聖人、サン=ダミアンは薬剤師の守護聖人とされている。

Trémolet de Villers (1998) pp. 323-324.; *RIP*.

48. 7. 11a. サン=テニミー／サン=テニミー修道院 (Monastère de Sainte-Enimie)

サン=テニミー (サント=エニミー) は、ロゼール県南西部の 2 つの石灰岩台地であるソヴテール台地 (Causse de Sauveterre) とメジャン台地 (Causse Méjean) の間をうがつように東西に続くタルヌ溪谷にあって、まことに風光明媚な景観を呈する谷間の集落である。マンドから

は国道 N88 と県道 D986 で南へ約 28 キロ、フロラックからは国道 N106 と県道 D907B を西へほぼ同じ距離である。

サン=テニミーの名は、6～7 世紀に生きたメロヴィング王家の王女エニミー（Énimie）に由来する。彼女はメロヴィング朝の第 3 代フランク国王クロテール 2 世（クロタール 2 世、在位 613-629 年）の娘とされ、兄はフランク王位を継ぐダゴベール 1 世（ダゴベルト 1 世、フランク王在位 603-639 年）である（一説にはクローヴィス 2 世の娘とも言われたこともあった）。13 世紀のトロバドゥール（吟遊詩人）であるベルトラン・ドゥ・マルセイユなどが伝える伝説によれば、王女エニミーは日頃から貧者や病者を哀れみ、彼らに手を差し伸べる優しい心の持ち主であったが、同時に稀に見るその美しさから数多くの求婚者を集め、父王クロテール 2 世もそのうちの 1 人と結婚させることに決めた。しかし信仰心の篤いエニミー自身はそれを拒み、あくまでも純潔のままにとどまることを望んで、自分を醜くしてくれるよう神に祈った。すると神はその願いを聞き入れ、彼女を重いライ病に罹らせたのであった。しかしエニミーがそのあまりの苦しきから神に助けを求めると、天使が現れて彼女にジェヴォーダンにあるビュルルの泉（fontaine de Burle／またはビュルラティスの泉 fontaine de Burlatis）に向かうよう告げた。はるばるタルヌ渓谷までやって来てその泉を見つけた彼女が、その中に身をつけると病はたちどころに癒えたのだが、いざパリに戻ろうとすると再び元の醜い状態に戻ってしまい、これを 3 回繰り返したのち、ついにエニミーはこの地にとどまるのが自分の運命なのだということを悟ったのであった。彼女はこの地に女子修道院を創建し、時のマンド司教イレール（Ilère）によってその修道院長に任じられた。その後この修道院の周囲には次第に集落が形作られ、この地がサン=テニミーと呼ばれるようになった（地名表記としては《E》の上にアクサン記号が付かない）。

エニミーはライ病に苦しむ病者を癒したり、あるいは司教イレールとともに悪魔の化身であるドラゴン（drac）を退治したりという逸話（légende du Pas de Soucy [48.7.7a.]）を残しつつ、サン=テニミーの村のすぐ南西の断崖の中腹にある洞窟（Ermitage de Sainte-Énimie）で晩年を過ごし、628 年頃に没した。言い伝えによればその後、サン=ドニ修道院のために聖人たちの聖遺物蒐集に余念のなかった国王ダゴベール 1 世が、すでに聖人として崇められていた妹エニミーの墓にも目をつけ、その遺骸などの聖遺物を手に入れるためにジェヴォーダンまでやって来た。しかし死後もこの地を離れることを望まなかったエニミーは、自らの石棺に小さい名前を刻ませていなかった。さらに修道院の修道女たちもエニミーの聖遺物を手放すことを恐れ、聖女の棺の上に、彼女が名付け親であった同じ名前のエニミーという娘の石棺（その棺には「エニミー」という名が刻まれていた）を重ねて安置していたため、兄王は結局そうとは知らずにその娘の方の遺骸をサン=ドニに運んでいったのであった。かくして聖女エニミーの聖遺物は、彼女が晩年を過ごした洞窟のエルミタージュやサン=テニミー修道院に置かれることとなったのであった。

現在サン=テニミーの村の上に建つ修道院の建物は、聖女エニミーが最初に創建した女子修道院のものではない。その場所にはもともとマンド司教イレールが 6 世紀半ばに創建した男子のための僧院があった。10 世紀になる頃にはかなり荒廃していたが、951 年にマンド司教エテ

イエヌが、この僧院を教皇アガペトゥス2世の認可を得て、オーヴェルニュにあるベネディクト派のサン=シャフル修道院 (Abbaye Saint-Chaffre du Monastier) に付属させた。その後次第に修道士たちが増えるとともに、聖女エニミーの聖遺物に惹かれて多くの巡礼たちがここを訪れるようになり、12世紀に隆盛期を迎えた。サン=テニミー修道院は、サン=シャフル修道院の傘下でありながら、サン=シャフル本院の修道院長をも輩出している (Guillaum II, 1074-1086 と Arnaud, 1165-1176)。また自身の傘下に Saint-Chély-du-Tarn、Hures、Prades-du-Tarn、Vébron、Saint-André-de-Valborgne、Bonneterre などの小修道院を収めていた。現在残る修道院の建物は、12世紀にサン=シャフルの修道士たちにもとで大幅に改築・拡張されたものである。しかしフランス革命に際して修道士たちは追い払われ、修道院が持っていた数多くの古文書や聖具類、見事な祭壇などが略奪や火災によって失われてしまった。最後には建物が国有財産として売却された。1932年になって歴史的建造物 (monument historique) に指定された。現在、修道院の建物はサン=テニミーのコミュニンの所有となっている。

12世紀当時の修道院の建物で現在まで残っているのは、修道士たちの「食事棟」 (réfectoire / rou refecou) およびその地下の倉庫部分のみである (その北に建つサント=マドレーヌ礼拝堂については後述)。この食事棟は、時に修道士たちの「集会室」 (salle capitulaire) と呼ばれる4ベイからなる方形の建物で、南北の長さが24メートル、東西の幅が6メートル、天井に架かる半円筒形トンネル・ヴォールトの高さは頭頂部で14メートルである。各ベイは半円形 (一部はわずかに尖頭形) の横断アーチで区切られ、その横断アーチはそれぞれ柱頭彫刻の付いた壁付き円柱が受ける。それらの柱頭彫刻は、吹き上がる植物の葉とその間に顔をのぞかせる人間の顔である。東西の両側の壁の各ベイには、ヴォールトが架かる水平のコーニスの下に半円形の大きな壁アーチが付き、東側の壁ではさらにその中に隅切りされた半円頭形の窓が開いている (下辺は石段状である)。西側の壁には、最も北側のヴォールトに鐘楼への登り口が残り、北から2番目のベイにはこの食堂への出入口が開いている (この出入口の外側には大きなクラヴォーが並ぶ半円形のアーチが見られる)。南壁には半円頭アーチの内側にやはり半円頭形の縦長の窓が、内部に隅切りされる形で開いている。下辺はやはり石段状である。いっぽう北壁は最上部に長方形の小さな開口部があるのみである。この食堂 (または集会室) は、全体的な構成がシンプルであるが非常に均整が取れたものとなっていて、ロマネスク様式の美しさを今によく伝えている。柱頭彫刻はあるものの、あたかもシトー会聖堂のごとき静謐な美しさを醸し出している。フランス革命によって失われたこの修道院の他の建物も同じようにこのように見事な美しさを持っていたのかと思うと、それらが今日にまで残されていないことが残念でならない。

食堂の真下は天井の低い倉庫となっていて、交差ヴォールトとなっている天井を方形の柱が支えている。



48.7.11a. Sainte-Enimie, réfectoire.

食堂棟の北に残るサント=マドレーヌ礼拝堂（Chapelle Sainte-Madeleine）は、ゴシック期に入った1235年にギヨーム・ドゥ・セナレ（Guillaume de Cébarêt）によって建設されたと考えられているものであるが、建築的には12世紀のロマネスク様式の雰囲気をよく保持している。サン=テニミー修道院を囲んでいた周壁のすぐ内側に接する形で建てられており、東壁は切妻形で半円頭形の細長くて狭い窓の下に、半円頭形アーチのポルタイユが開いている。後陣は切り整えられた石積みによる美しい半円形で、細長い開口部が2つ開いており、その上の水平のコーニスの上に増築された部分から、この礼拝堂が半ば要塞化された様子が見て取れる。礼拝堂の内部は単身廊形式の小規模なもので、天井には半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かり、後陣は半ドームが載る半円形平面プランである。フランス革命の後は一時期家畜小屋として利用されたりしたが、1956年にサン=テニミーのコミュニーの所有となって大幅な修復工事が行われた。ただし通常は一般に公開されていない。

André (1867) pp. 4-15. ; Balmelle (1945) pp. 62-63. ; Bertran de Marseille (2001) pp. 7-20, pp. 31-64, pp. 68-78, pp. 85-96. ; Buffière (1985) pp. 251-256, pp. 354-360, pp. 541-543. ; Chabrol (2002) pp. 112-114. ; Chastel (1981) p. 27. ; Delon (2016) pp. 43-45. ; Nougaret et Saint-Jean (1991) pp. 298-299. ; Orimaud et Balmelle (1925) pp. 99-101. ; Trémolet de Villers (1998) pp. 324-333. ; *RIP*.

参考文献と略記号

- André, Ferdinand (1867) : *Histoire du Monastère et prieuré de Sainte-Enimie*, Mende, réimprime, Nîmes, Lacour.
- Balmelle, Marius (1945) : *Répertoire archéologique du Département de La Lozère, Périodes Wisigothique, Carolingienne et Romane*, Mende, Imprimerie G. Pauc.
- Bertran de Marseille (2001) : *La vida de Santa Enimia (La vie de Sainte Enimie)*, présentée et traduite par Felix Buffière, Édition la Confrérie.
- Buffière, Felix (1985) : *«ce tant rude» Gévaudan*, tome 1, Mende, Société des Lettres, Sciences et Arts de la Lozère.
- Chabrol, Jean-Paul, dir (2002) : *La Lozère de la Préhistoire à nos jours*, Saint-Jean-d'Angely, Éditions Jean-Michel Bordessoules.
- Chastel, Rémy (1981) : *Églises de Lozère*, Paris, Art et Tourisme.
- Delon, J.-B. (1941) : *Histoire de Gévaudan-Lozère*, réimprimé, Nîmes, Lacour.
- Durliat, Marcel, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, IIC, Cévennes, Languedoc, Roussillon*, Paris, Robert Laffont.
- Germer-Durand, François (1888) : “Note sur l’ermitage de Saint-Pons” dans *Bulletin de la Société d’agriculture, industrie, sciences et arts du département de la Lozère*, tome.39. Mende, Imprimerie de A. Privat.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1991) : *Vivarais Gévaudan Romans*. Saint-Léger-Vauban, Zodi-
- 第1号（2019年2月）

中川久嗣

aque.

Orimaud, Albert et Balmelle, Marius (1925) : *Précis d'histoire du Gévaudan*, Librairie E. Champion de Paris et Librairie A. Planchon Bonnefoy de Mende.

Ribéra-Pervillé, Claude (2013) : *Chemins de l'art roman en Languedoc-Roussillon*. Rennes, Ouest-France.

Trémolet de Villers, Anne (1998) : *Églises Romanes oubliées du Gévaudan*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.

Trintignac, Alain (2012) : *Carte Archéologique de la Gaule, 48, La Lozère*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

Verrot, Michel (1994) : *Églises rurales & décors peints en Lozère*, Chanac, La Régordane.

Werth, François (2013) : *Le patrimoine caché et méconnu en Languedoc-Roussillon*, Rennes, Ouest-France.

Web-site

La Base Mérimée. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/>) 2018.12.01 アクセス

GV : Guide de Visite.

RIP: Renseignements ou Informations sur Place.